

『就実論叢』第47号 抜刷

就実大学・就実短期大学 2018年2月28日 発行

# 中学校家庭科の「幼児との触れ合い体験学習」 における教師の危険意識に関する検討

**A study on the Dangers during the Interaction Between Young Children and Junior  
High School Students in Home Economics Class from the Teacher's Perspective**

伊 藤 優  
山 本 奈 美  
伊 藤 圭 子

# 中学校家庭科の「幼児との触れ合い体験学習」における 教師の危険意識に関する検討

A study on the Dangers during the Interaction Between Young Children and  
Junior High School Students in Home Economics Class from the Teacher's Perspective

伊藤 優 (幼児教育学科)

ITO Yu

山本 奈美 (和歌山大学)

YAMAMOTO Nami

伊藤 圭子 (広島大学)

ITO Keiko

キーワード：危険意識、幼児との触れ合い体験学習、家庭科、中学校

## 1. はじめに

近年、異年齢の子どもがかかわる機会の減少が指摘され、学校教育においては保育学習や幼児と触れ合う機会の充実が求められるようになった。中学校学習指導要領の技術・家庭の家庭分野では、幼児と触れ合うなどの活動を通して幼児への関心を高め、かかわり方を工夫する学習が必修となり、幼稚園や保育所などで幼児との触れ合い体験を重視することが明記されている(文部科学省, 2008)。これを受けて、中学校家庭科の保育学習では、多くの学校で幼児との触れ合い体験が行われ、その効果が報告されている。例えば、岡野・伊藤・倉持・金田(2011)は、教室で学んだ知識と触れ合い体験が融合して一層の教育効果をもたらすことを示しており、佐藤(2004)は、体験学習の前後で、中学生が乳幼児についてより具体的にイメージをもてるようになったことを明らかにしている。また、天野(2014)や伊藤(2007)は触れ合い体験による幼児側の効果についても明示している。

しかし、幼児に対する知識や経験が乏しく、触れ合い経験の少ない中学生が幼児と触れ合う際には、保育者や家庭科教師の予想を超えた危険を伴う事態が生じていると予想される。保育者養成校の学生であっても9割近い学生が危険事例を体験していることを、齋藤・中野(2013)は保育所実習を終えた実習生に対する質問紙調査によって明らかにしている。また、保育士を対象に保育場面で発生するヒヤリ・ハット体験について質問紙調査を行った石川・大野木・伊東(2009)は、76.6%の保育士が過去3ヶ月のうちにヒヤリ・ハット場면을体験していることを報告すると共に、経験年数が長いほど事故への危険感受性を有していることを示唆している。つまり、ベテランの保育者ほど事故になる前に危険を察知し、未然に防ぐ

ことができている可能性が高いといえる。

このように、幼児との触れ合い体験は中学生にとっても幼児にとっても効果が大きい一方で、幼児と触れ合うことに慣れていない中学生が保育現場に入ることにより危険を引き起こす可能性が大きいと推察される。

そこで本研究では、中学校家庭科での幼児との触れ合い体験学習における危険状況および安全教育の現状を中学校の家庭科教師への質問紙調査から明らかにし、幼児との触れ合い体験学習前の指導のあり方について検討することを目的とする。

## 2. 方法

2015年9月に、全日本中学校技術・家庭科研究会事務局長49名に、熱心に家庭科授業に取り組んでいる教師の推薦を依頼した。推薦された教師203名に対して、2015年10月から2015年12月にかけて調査を郵送法によって実施した。有効回答率は 61.6% (125名)であった。

## 3. 結果と考察

### (1) 家庭科教師の属性

本対象者125名の性別は、女性121名 (96.8%)、男性3名 (2.4%) であり (不明1名)、家庭科免許状保有の教師は120名 (96.0%)、保有しない教師は5名 (4.0%) であった。

本調査対象者の教師歴および家庭科授業経験年数を示したのが表1である。

表1 教師歴および家庭科授業経験年数

年数	実数は人数、( )内は%	
	教師歴	家庭科経験年数
0年以上～5年以下	3( 2.4)	6( 4.9)
6年以上～10年以下	14(11.4)	16(13.1)
11年以上～15年以下	10( 8.1)	10( 8.2)
16年以上～20年以下	12( 9.8)	19(15.6)
21年以上～25年以下	21(17.1)	21(17.2)
26年以上～30年以下	36(29.3)	28(23.0)
31年以上～35年以下	21(17.1)	20(16.4)
36年以上～40年以下	6( 4.9)	2( 1.6)
合計	123( 100)	122( 100)

(不明を除く)

この表を概観すると、家庭科担当教師の教師歴は、「26年以上～30年以下」が36名 (29.3%) で最も多く、家庭科授業経験年数も「26年以上～30年以下」28名 (23.0%) が最も多くみられた。本調査対象者の多くは、経験豊富な教師であることが分かる。

### (2) 幼児との触れ合い体験学習における生徒への指導の徹底意識

幼児との触れ合い体験学習における事前指導として、それぞれの留意事項をどの程度徹底

して生徒に指導しているかを尋ねた結果を表2に示す。

表2 子どもたちへの指導の徹底意識

実数は人数、( )内は%

授業場面での留意事項	徹底できている	少し徹底できている	どちらともいえない	あまり徹底できていない	徹底できていない	全体
幼児との触れ合い時、髪やつめ、手洗いなど、清潔面に注意する	70(63.6)	33(30.0)	6(5.5)	1(0.9)	0(0.0)	110(100.0)
幼児との触れ合い時、動きやすい服装で、ヘアピン、アクセサリなどは身に付けない	84(77.1)	15(13.8)	8(7.3)	0(0.0)	2(1.8)	109(100.0)
幼児との触れ合い時、大きな声を出したり、乱暴な動きをしない	69(62.7)	35(31.8)	6(5.5)	0(0.0)	0(0.0)	110(100.0)
幼児との触れ合い時、緊急時(幼児のけが、地震など)の対応を事前に理解している	24(22.0)	47(43.1)	24(22.0)	9(8.3)	5(4.6)	109(100.0)

(不明を除く)

教師が生徒に徹底して指導できていると思っている留意事項は「幼児との触れ合い時、動きやすい服装で、ヘアピン、アクセサリなどは身に付けない」84名(77.1%)、「幼児との触れ合い時、髪やつめ、手洗いなど、清潔面に注意する」70名(63.6%)、「幼児との触れ合い時、大きな声を出したり、乱暴な動きをしない」69名(62.7%)の順で、これらの事項は「徹底できている」「少し徹底できている」を併せると、約9割強の教師が徹底できていると考えている。「幼児との触れ合い時、緊急時(幼児のけが、地震など)の対応を事前に理解している」は、「少し徹底できている」47名(43.1%)が最も多く、「徹底できている」を合わせても約6割強であった。つまり、中学生の衛生面や服装などに関しては事前指導を徹底していると考えているが、幼児との触れ合い体験時における緊急対応に関しては、指導が及んでいないことが示唆された。

### (3) 中学生の幼児との触れ合い体験における教師のヒヤリ・ハット体験

前項のような徹底指導意識を持つ教師は、これまで生徒の幼児との触れ合い体験学習の指導において、危険な状況に直面したことがあるのであろうか。幼児との触れ合い体験に関する授業場面において、子どもが怪我をしたり危険だと感じて「ヒヤッ」としたことや「ハット」としたことを自由記述で尋ねた。37名(29.6%)の教師から回答があり、それを内容別に分類した結果を表3に示す。内容は、「肩車や抱っこ」、「幼児の特徴的行動への対応」、「幼

稚園、保育園までの移動]、「その他」に大別された。

表3 幼児との触れ合い体験学習におけるヒヤリ・ハット経験（複数回答）

実数は回答数、( )内は%

ヒヤリ・ハット状況（原文通り）	中学校 (N=37)
<p>肩車や抱っこ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・何十年前、触れ合い体験時生徒が幼児を肩車していて、幼児を石の上に落としてしまい、幼児は大げがをした。</li> <li>・肩車をしてかけ回るあそびをしている中、幼児の指示で教室を出る際、扉上部に幼児の頭がぶつかるかとヒヤッとした。</li> <li>・中学生が幼児を抱っこして立っていたら、幼児が手を離して後ろに反り返った。等</li> </ul>	15(40.5)
<p>幼児の特徴的行動への対応</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・幼児の手をひっぱり脱臼させたらしい。</li> <li>・保育所で実習している園庭で、中学生が幼児用の車を押している時、車に乗っている園児が落ちそうになり驚いた。</li> <li>・抱っこしていた赤ちゃんを床にそっとおいた途端、赤ちゃんがバランスをとれずに近くにあったおもちゃに頭をゴン！とぶつけた。</li> <li>・昔、保育所で着がえをさせている時、左肩にスナップのあるトレーナーをきていた幼児が服を脱ぎ始め、中学生がよかれと思ひっぽたら首がしまり、幼児が泣きさげんだ。</li> <li>・保育園で男子生徒が4歳児と遊んでいたところ（室内）前後左右から園児がとびついてきて、生徒が倒れ、園児も倒れた。等</li> </ul>	11(29.7)
<p>幼稚園、保育園までの移動</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・保育園までの道のりの途中で車道にはみ出す生徒がいたこと。等</li> </ul>	5(13.5)
<p>その他</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・幼児向けのフェルト等で製作したおもちゃに針が入っていた。</li> <li>・生徒が名札をつけていきましたが、大きすぎて、幼児の頭に当たってしまった。</li> <li>・発達障がいの子がハサミを持って走り回った。</li> <li>・選択保育で毎週近くの保育園に行き、触れ合って実習していたが、発達障がいの生徒が園児に「バカ」と言われたことにキレ、バットをふりまわした。幸い園児にケガはなく謝罪で済んだが、園と保護者の関係にも不安と迷惑をかけてしまった。等</li> </ul>	6(16.2)

表3から、教師のヒヤリ・ハット体験で最も多かったのは、生徒が幼児を肩車や抱っこをしているときで全体の約4割が記述していた。幼児との触れ合い体験では、生徒が子どもを喜ばせようと肩車や抱っこをして楽しませている時に危険な場面が多くあることがわかる。次に多く記述されていたのが、幼児の発達段階における特徴的な行動に対応できなかったことで、約3割に記述がみられた。日頃、幼児とかかわる機会がなかった生徒が多いため、幼児がどのような行動をとるのか予測ができなかったと推察される。幼児の特徴的な行動を予め具体的に学習したうえで、実際に幼児と触れ合うことが重要であると考えられる。さらに、幼児と関わっているときだけでなく、幼稚園や保育園に行く際の移動においても危険な場面があることが記述されていた。また、特別な支援を必要とする生徒と園児とのかかわり方についても検討していく必要があることが示唆された。

表2において、「幼児との触れ合い時、緊急時（幼児のけが、地震など）の対応を事前に

理解している」に関する留意事項の徹底は、衛生面や服装などに関する留意事項に比べ徹底意識が低かったが、幼児との関わりが乏しく、どのように幼児と関わってよいかわからない生徒が多いことによる危険状況が潜在的に生じていることを教師は認識する必要があると考える。

#### (4) 幼児との触れ合い体験学習における指導方法

幼児との触れ合い体験学習の事前指導として教師が有効であると考える方法を自由記述で尋ねた結果を表4に示す。

表4 幼児との触れ合い体験学習における有効な指導方法

自由記述（原文通り）
<p><b>指導形態および指導方法</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・幼児との触れ合い体験の前に、前年度の様子を写真で見せて（パワーポイント）中学生も幼児もけがなく実施できるよう、注意する点を話し合う活動を行う。</li> <li>・生徒対幼児を1対1のペアにして交流させるようにしている。</li> <li>・事前指導で留意事項を園長先生からの伝言として伝えると守ってくれます。</li> </ul>
<p><b>生徒への留意事項</b></p> <p><b>保育場面における留意事項</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・幼児へのあいさつ、言葉づかいをきちんとする。目の高さ、ゆっくり、やさしく。</li> <li>・幼児を高いところ（肩より上）に持ち上げない。</li> <li>・幼児から目をはなさない。</li> <li>・幼児との触れ合い計画時に発達段階の違いを理解する。</li> <li>・幼児との触れ合いの時、幼児の体力や特性に応じた接し方を心がける。</li> <li>・幼児の腕を強く引っ張らない。</li> <li>・幼児との触れ合いの時、マスクをする。</li> <li>・されていやなコト（けったりつねったり悪口）はイヤと口で伝える。がまんしたり、放っておいたりしない。</li> <li>・困ったときには、自分で判断せず、周囲の保育士に伝える。</li> </ul> <p><b>保育施設訪問における留意事項</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・中学生3人以上でかたまらない。</li> <li>・おもちゃの製作時のはさみ、カッターは持っていかない。</li> <li>・持参する手づくりおもちゃの安全を確認する（パーツがはずれない、のみこめないなど）</li> <li>・訪問時の交通安全（自転車での左側一列走行、赤信号停止）。</li> </ul>

「指導形態および指導方法」に関しては、幼児との触れ合い体験前にまだ幼児と具体的に触れ合ったことがない生徒でも幼児の行動をイメージしやすいように、幼児と触れ合う上での留意事項をパワーポイントや写真などで見せて説明することが挙げられた。表3に示したヒヤリ・ハット経験の結果からも、実践の必要がある有効な方法であると考えられる。

「生徒への留意事項に関する記述」は、保育場面における留意事項と保育施設訪問における留意事項に大別された。保育場面における留意事項に関しては、幼児の発達段階の違いや体力、特性に応じた接し方についての内容が記述されていた。これらの内容は、抽象的な文

言で伝えるだけでは、実際の幼児との触れ合い場面では活用されないであろう。生徒が幼児の特徴を具体的にイメージでき、実際の保育場面をシュミレーションできるような事前指導が行われれば、危険な状況が軽減するのではないかと考えられる。また、初めて幼児と触れ合う生徒もいるため、「困ったときには、自分で判断せず、周囲の保育士に伝える」という緊急時における対応を事前指導として生徒に伝えておくことも必要である。

保育施設訪問における留意事項に関しては、持参するおもちゃや持ち物への配慮、さらには訪問時の交通安全についての記述がみられた。

#### 4. 総合考察

本研究では、中学校家庭科での幼児との触れ合い体験学習における危険状況および安全教育の現状を明らかにすることを目的とし、中学校の家庭科教師に質問紙調査を行った。その結果、中学校で行われている幼児との触れ合い体験においては、幼児の行動特徴を知らなかったがために、熱心に幼児とかかわろうとしている中で危険が生じていることが明らかとなった。一方で、中学校の家庭科の授業においては、準備物や服装などについての指導は徹底されていたが、それに比べ実際に中学生が幼児と触れ合う際の緊急時への対応に関する指導などを徹底していると回答した教師は少なかった。このことから、具体的に写真や映像などを活用しながら、事前学習として幼児の特性を十分理解して接するよう指導する必要性が示唆された。

幼児との触れ合い体験は、中学生が幼児と関わる経験や幼児に関する知識を学ぶ場でもあり、同時に、幼児にとっても普段関わる機会が少ない中学生と同じ時間を過ごし、遊ぶことができる貴重な機会となる。そのため、中学生・幼児の両者にとって、安全で安心した環境のもとで触れ合える機会を作ることが重要となってくる。

平成29年告示の新学習指導要領（文部科学省）においても、引き続き中学校家庭科における幼児との触れ合い体験が重視されている。さらに小学校家庭科（文部科学省，2017）においても「幼児又は低学年の児童や高齢者など異なる世代の人々との関わりについても扱うこと」と示された。少子高齢化の中で触れ合う機会が乏しい異世代の人々とかかわりについて、家庭科の授業としてその学びを設計することが求められている。先行して取り組んでいる中学校の状況について、小・中学校で情報を共有することも有効ではないかと考えられる。

#### 引用文献

- 天野美和子（2014）幼稚園・保育園における幼児と中学生との“ふれ合い体験活動”を通しての幼児側の経験. 日本家庭科教育学会誌. 57（3）, 196-207
- 石川昭義・大野木裕明・伊東知之（2009）保育士のヒヤリハット体験. 仁愛大学研究紀要 人間生活学部編. 1, 39-52
- 伊藤葉子（2007）中・高校生の家庭科の保育体験学習の教育的課題に関する検討. 日本家政

学会誌. 58 (6), 315-326

文部科学省 (2008) 中学校学習指導要領解説技術・家庭編

文部科学省 (2017) 中学校学習指導要領解説技術・家庭編

文部科学省 (2017) 小学校学習指導要領解説

岡野雅子・伊藤葉子・倉持清美・金田利子 (2011) 家庭科の幼児とのふれ合い体験と保育施設での職場体験学習の効果の比較. 日本家庭科教育学会誌. 54 (1), 31-39

齋藤信・中野隆司 (2013) 保育所実習における危険事例と安全管理意識 (1). 山梨学院短期大学研究紀要. 33, 62-72

佐藤洋美 (2004) 乳幼児とのふれあい体験学習が中学生の子育てに対するイメージに与える影響. 日本生活体験学習学会誌. 4, 35-54